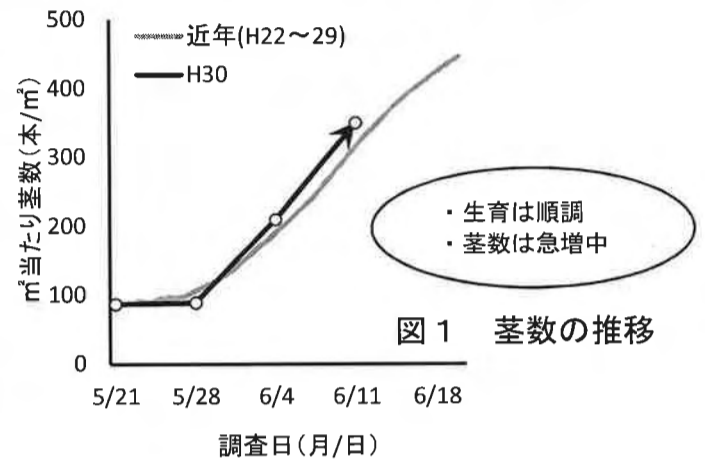


- 中干し後から幼穂形成期までは、間断かん水によって根の発達をさらに促しましょう。
- 「てんたかく」の幼穂長が1～2mmになったら、遅れずに穂肥を施用しましょう。
- 畦畔や雑草地の草刈りを継続的に行って、斑点米カメムシ類の発生を抑えましょう。
- ほ場に置いてある補植用の苗は、すぐに除去しましょう。

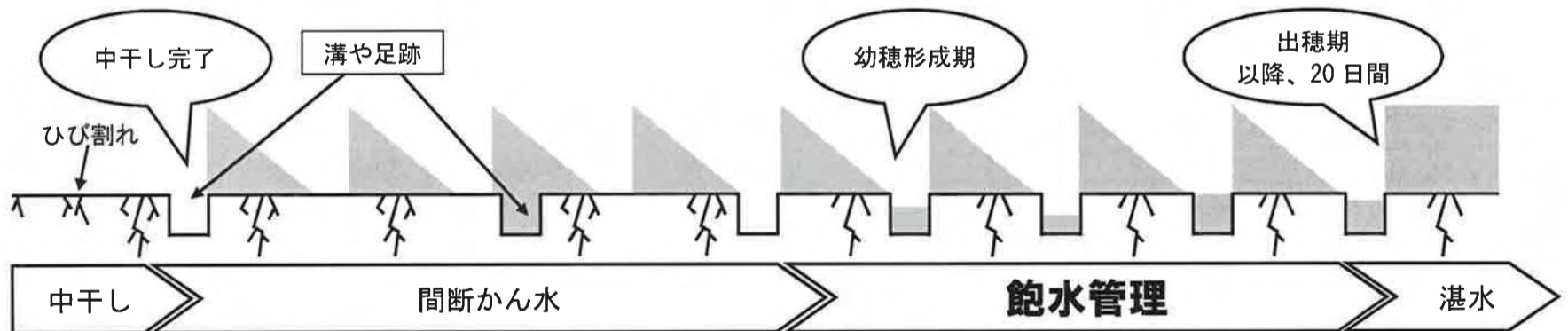
【コシヒカリの生育状況】 (6月11日現在:白井谷調査ほ)

調査年	田植日	茎数		葉令 (葉)	葉色
		(本/株)	(本/m ²)		
H30	5/12	17.7	349	8.4	4.3
H29	5/11	16.4	349	7.5	4.2
近年値 (H22～29)	5/11	16.6	315	7.7	4.1



1. 中干し後の水管理

- 中干し後は間断かん水を行い、秋の収穫作業に向けて地耐力を高めましょう。
- 中干しが不十分なほ場は、幼穂形成期(てんたかく6月下旬頃、コシヒカリ7月中旬頃)まで田干しを繰り返して実施しましょう。
- 幼穂形成期から出穂期までは、飽水管理を**しましょう。
(飽水管理では「ほ場に入水→自然減水→溝や足跡の水が無くなる前に入水」を繰り返す)
(中干し後の水管理のイメージ)



2. 「てんたかく」の穂肥

～穂肥は幼穂長1～2mmで遅れず施用する～

■基肥一発肥料の場合

- 幼穂形成期頃の葉色が4.2以下に低下した場合**は、すぐにNKグリーン30(窒素成分16%)で7～10kg/10a程度を追肥して、穂揃期の葉色を4.5に誘導しましょう。

■分施田の場合

【穂肥(NKグリーン30)の施用時期及び施用量の目安】

	1回目	2回目
施用時期	7月1日頃 (5月上旬植えの場合) 【幼穂長1～2mm】	1回目の10日後
施用量	10a当たり10～12kg	10a当たり12kg



※幼穂形成期の葉色が4.5以上と濃く、茎数が多い(30本/株以上)ほ場では、1回目の穂肥の施用は控えましょう。

裏面に続きます

3. 「てんたかく」の防除

～「てんたかく」の1回目防除は、穂ばらみ期に実施～

- 苗箱施薬剤(ルーチンアドスピノ箱粒剤)には、紋枯病の防除薬剤が入っていないので、穂ばらみ期に必ず防除しましょう。
- 防除時期の目安や農薬名は下表を参考に実施してください。
- 農薬を散布するときは、散布用マスクや手袋を着用して安全に作業しましょう。

【1回目防除時期の目安】

散布時期	薬剤名・散布量	対象病害虫
穂ばらみ期 (出穂14日前頃) 7月6日頃	ビームバシボン粉剤5DL 散布量：4kg/10a (収穫14日前まで)	紋枯病 いもち病 ウンカ類 カメムシ類

ビームバシボン粉剤5DLを上手に効かせるためには、**散布時の水田を浅水状態**にして、薬剤を**株元までかかるよう散布**しましょう。

※「てんたかく」の出穂日は7月20日頃と予想されます。

※「てんたかく」の2回目以降の防除計画と「コシヒカリ」の防除計画は次号の営農情報でお知らせします。

- 農薬は使用基準を守って、正しく使用しましょう。
- 農薬は飛散防止のため、風の無い時に散布しましょう。
- 生産履歴簿、GAPの記帳は作業後速やかに行いましょう。

4. 草刈りの徹底

～斑点米カメムシ類の発生源を減らす～

- 斑点米発生防止のため、カメムシ類の発生源となる畦畔や水田周辺の雑草地の草刈りを徹底しましょう。
- 刈取った草は、用排水路に流したり、燃やしたりしないでください。
- 草刈り作業の際は防護具を装着し、草刈機は安全に使用しましょう。

現在発生している
主な斑点米カメムシ類



アカスジカスミカメ

籾と同じくらい
の大きさ

現在、このような
イネ科雑草地で、
斑点米カメムシ類が
増加中

図2 山田地域内で斑点米カメムシ類の発生が確認できた雑草地(H30.6.5)

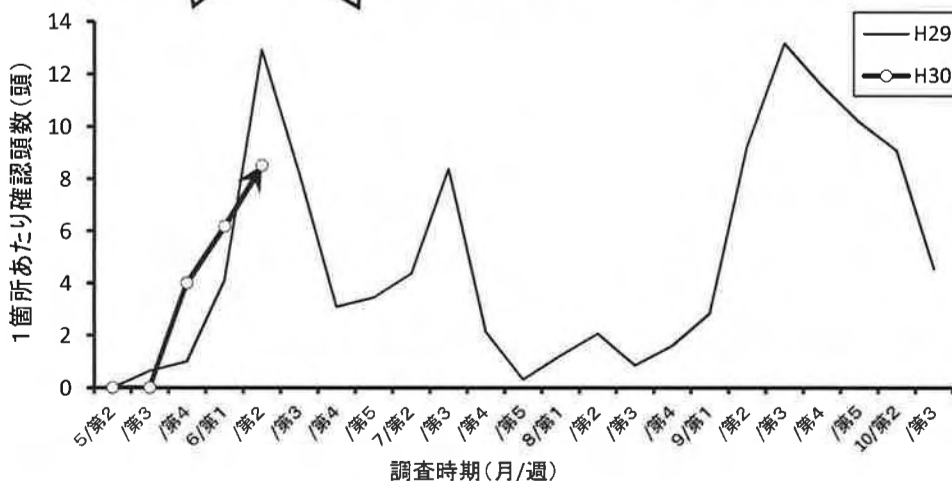


図3 山田地域とその周辺における斑点米カメムシ類発生状況
※29年は11～13箇所、30年は6箇所で調査

草刈運動期間 7月1日～7月10日 一斉草刈日 7月7日(土)、8日(日)